

マタイによる福音書14章「退かれ、教えられる主」

1A バプテスマのヨハネの死 1-12

1B 蘇りだと恐れたヘロデ 1-2

2B 不法に対峙するヨハネ 3-12

2A 五千人への給食 13-21

1B 群衆への憐れみ 13-14

2B 弟子たちへの教育 15-21

3A 嵐の中の水上歩行 22-33

1B 無理やりの解散 22-23

2B ペテロの訓練 24-33

4A イエスの奉仕 34-36

本文

マタイによる福音書 14 章を開いてください。私たちの学びは、先週、天の御国の奥義の喩えのところを見ました。ユダヤ人の宗教指導者がイエス様の宣教を拒んだことによって、イエス様は「分かる人たちにこそ分かる」かたちで、天の御国の深い部分を語り始められました。喩えなので、それ自体はとても分かり易いのですが、本当にどんな意味なのかを知るためには、弟子のように近くにいて、解き明かしていただかないといけません。

そして、マタイ 14 章また 15 章もそうですが、イエス様が「退く」という行動が目に見えてきます。群衆から離れて退く、またガリラヤ地方自体から退かれ、そこから離れたところで弟子たちと時間を退かれることをされます。これまでと変わらず、群衆には癒しを与えられ、憐れみを示していかれますが、けれどもイエス様の重点が、ご自身が父なる神と過ごすこと、そして弟子たちと過ごすこと変わってきます。また、イエス様は弟子たちを愛しておられました。彼らの、ご自身がなくなった後、同じような働きをすることを念頭に入れて、イエス様ご自身の働きに加わるようにさせていきます。ところで、私たちがしばしば、修養会という言葉を使い、宿泊しながら御言葉を聞く時を持ちますが、実は英語では、retreat といって「退く」という意味の言葉を使います。中国語では、「退修会」という言葉を使い、退避という言葉と、修養の言葉の二つを掛け合わせた言葉を使いますが、主に仕えて行く者たちが、退いてイエス様と時間を過ごし、教えられていくことが必要です。

1A バプテスマのヨハネの死 1-12

1 節から 12 節までには、バプテスマのヨハネが斬首されたことが書かれています。これまで、イエス様の宣教の働きが、バプテスマのヨハネの先駆的な働きと共に行われていたことを思い出してください。ヨハネが、「悔い改めなさい。天の御国が近づいたのだから。」と宣べ伝え始めました。

そして、イエス様が彼からバプテスマを受けられ、ほどなくして彼はここに出て来る、ヘロデによって牢屋に入れられます。彼は自分の弟子を送って、「はたして、あなたが来るべき方なのですか？」という質問をイエス様に持ってきました。そして、イエス様は確かにメシアが行なう盲目を直すであるとか、そういった癒しを示されました。そして群衆に対して、ヨハネこそが預言者の中で、女から生まれてきた者の中で最も偉大な者であるということを言われました。けれども、ユダヤ人指導者がヨハネを受け入れず、それからご自分も受け入れていないことを話されていました。

そしてついに、投獄されていたヨハネが斬首され、死んでしまうことがここに書かれています。ヨハネが天の御国の宣教の先駆者であるならば、死ぬことにおいても先駆者になっていると言えるでしょう。彼は、人の間の部分の深いところに入り込んで、そこで真っ直ぐ神の真理を伝え、それで殉教します。イエス様のその後が続いていくこととなります。

1B 蘇りだと恐れたヘロデ 1-2

1 そのころ、領主ヘロデはイエスのうわさを聞いて、2 家来たちに言った。「あれはバプテスマのヨハネだ。彼が死人の中からよみがえったのだ。だから、奇跡を行う力が彼のうちに働いているのだ。」

ここに出て来るヘロデは、ヘロデ・アンティパスのことです。私たちは、福音書や使徒行伝を読む時に、ヘロデの名が出てきたらどのヘロデであるかを区別しておかないといけません。イエス様がお生まれになった時に、ベツレヘムの男の子二歳以下の子たちを虐殺したのは、ヘロデ大王です。ヘロデ大王の死後、その王国は三人の息子に分割されました。ヘロデ・アルケラオ(アルケラオスマタイ 2:22)がユダヤとサマリアの地方を仕合しました。しかしその、横暴な政治のためにすぐに罷免されて、ユダヤとサマリアはローマ直轄領となりました。それで、カイサリアがローマのユダヤ属州の首府となったのです。次に、ヘロデ・ピリポ(フィリッポス)がガウラニティスやバタネアという、聖書ではバシヤンと言われていたところ、今のゴラン高原とその周辺を統治しました。イエス様が弟子たちを連れて、ピリポ・カイサリアに連れて行かれますが、そこがヘロデ・ピリポの領地です。

そして、ヘロデ・アンティパスがガリラヤ地方とペレア地方を統治しました。そこでイエス様が宣教をされていた時のヘロデと言え、多くがヘロデ・アンティパスになります。ガリラヤ湖畔のティベリアにガリラヤ地方の首府を造りました。そして、ペレア地方はヨルダン側の向こう側、東にあって、南北に長細く広がっている領地です。デカポリス地方の南にあります。そこで、イエス様がヨハネからバプテスマを受けられたし、また、ヨハネが幽閉されているのは、ヘロデ大王が造った要塞化した宮廷の一つである、「マケロス(マカエラス)」というところ、このヘロデ・アンティパスが、バプテスマのヨハネを殺し、イエス様をも殺そうとしました。その時にイエス様はヘロデ・アンティパスのことを「あの狐」と辛らつに呼ばれました(ルカ 13:32)。またエルサレムで十字架判決を受ける前にローマ総督ピラトからヘロデの所にイエス様が連行されました。奇跡を見たいと思ったけれど

も、イエス様は、まったく口を開かれませんでした。

ヘロデ・アンティパスや、ピリポもアルケラオも、王の称号ではなく、「領主」の称号のみでした。前の新改訳の版ですと、「国主」と訳されていたと思います。これは、テトラキアというもので「四分の支配」という意味で、分割統治をしている領主ということです。

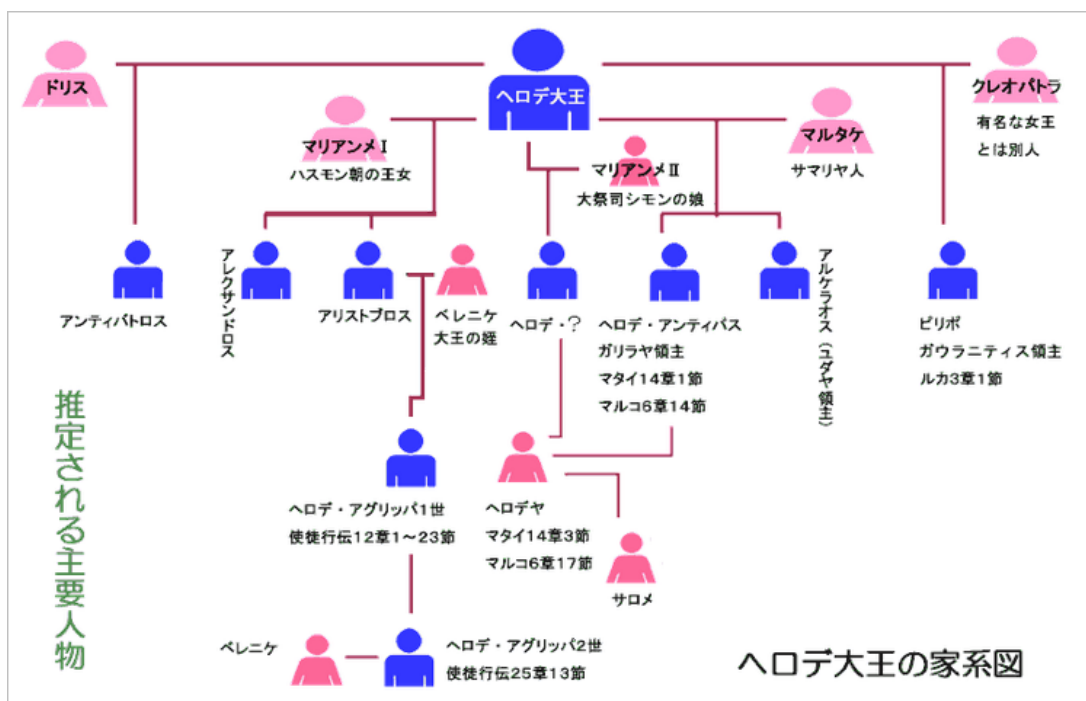
このヘロデが、イエス様の噂を聞きました。それらの奇跡には、命があり、バプテスマのヨハネが「死人の中からよみがえったのだ」と思わせるような、復活の力さえ感じていました。彼は俗物で、横暴な男でしたが、こういったことについては霊的に敏感だったのでしょう。ヨハネが、エリヤの霊と力を受けて宣教の働きをしましたが、その後を引き継ぐエリシャは、エリヤの霊の二倍の分け前をほしいとエリヤに願っていました。それでエリヤに働いていた御霊の二倍が、現れました。エリヤの時は火が天から降って来るなど、不法と悪に対する裁きが現れていたのに対して、エリシャは人々を癒し、水を癒し、また人をよみがえらせ、命をもたらす預言者でありました。イエス様が、まさにそのような働きをしています。同じ神による働きですが、バプテスマのヨハネは不正を明らかにする働きであるのに対して、イエス様は人々を癒し、生かし、養っていく働きをしておられました。それゆえに、ヘロデはイエス様の奇跡を見て、まるでヨハネの働きの続きであり、いやそれ以上の復活の力を見るような働きであると恐れたのです。そして、先に話したように彼は、このイエス様をも恐れて、殺そうとします。

2B 不法に対峙するヨハネ 3-12

3 実は、以前このヘロデは、自分の兄弟ピリポの妻ヘロディアのことでヨハネを捕らえて縛り、牢に入れていた。4 ヨハネが彼に、「あなたが彼女を自分のものにするには律法にかなっていない」と言い続けたからであった。5 ヘロデはヨハネを殺したいと思ったが、民衆を恐れた。彼らがヨハネを預言者と認めていたからであった。

ヘロデは、イドマヤ人です。イドマヤ人とはエドム人のことであり、新約時代にはそう呼ばれていました。かつてのエドム人は死海の南にあるセイルの地域に住んでいましたが、ナバタイ人がそこに住むようになり、彼らはユダヤ地方の南に移動していきました。そこで、ハスモン朝のヨハネ・ヒルカノス一世によって、ユダヤ教に強制的に改宗させられました。

ですから、ヘロデはユダヤ教の改宗者です。しかし、ローマの文化や習慣を受け入れており、また、非常に不道德な生活を送っていました。ここに「自分の兄弟ピリポ」とありますが、先ほどの領主であるヘロデ・ピリポとは違う人物です。彼は、ヘロデ大王の息子です。そのピリポの妻が「ヘロディア」と言います。彼女はヘロデ大王の姪の娘になります。このヘロデ・ピリポとヘロディアの間にはサロメという娘が生まれていました。



ヘロデ・アンティパスは、ナバタイ王国の王アレタス四世の娘でファサエリスと結婚していました。ところが、彼はヘロディアと恋仲になりました。明らかな律法違反です。レビ記 20 章 21 節に、「人がもし、自分の兄弟の妻をめとるなら、それは忌まわしいことだ。彼はその兄弟の裸をあらわにしたのである。彼らは子のいない者となる。」とあります。それをヨハネが責めたのです。ただでさえ、何がなんだか分からないぐらい複雑になっているヘロデ家のドロドロしたところに、いきなりヨハネはメスを入れました。それで、ヘロデは悔い改めるところか、彼をむしろ殺そうと思いました。

けれども、民衆はヨハネを預言者だとみなしていたのです。宗教指導者らは認めていませんでしたが、民衆は預言者だと認めていました。それで、自分が殺したら預言者を殺したということになり、ユダヤ人を治めることはもはやできなくなります。

6 ところが、ヘロデの誕生祝いがあり、ヘロディアの娘が皆の前で踊りを踊ってヘロデを喜ばせた。
7 それで彼は娘に誓い、求める物は何でも与えると約束した。

「ヘロディアの娘」が今、話したサロメのことです。ピリポとヘロディアの間に生まれた娘ですが、彼女が皆の前で踊りました。まだ十代の女の子ではなかったか？と言われていています。けれども、この踊りを見て、ヘロデは喜んでいました。性的に欲情したのです。すごく官能的な踊りであったと言われます。自分の娘で欲情するのですから、どれだけ不道徳であったか知れたものです。

8 すると、娘は母親にそそのかされて、「今ここで、バプテスマのヨハネの首を盆に載せて私に下

¹ <https://goo.gl/images/52VLUZ>

さい」と言った。9 王は心を痛めたが、自分が誓ったことであり、列席の人たちの手前もあって、与えるように命じ、10 人を遣わして、牢の中でヨハネの首をはねさせた。11 その首は盆に載せて運ばれ、少女に与えられたので、少女はそれを母親のところに持って行った。12 それから、ヨハネの弟子たちがやって来て遺体を引き取り、葬った。そして、イエスのところに行って報告した。

ヘロディアは、まさにイゼベルのような悪女です。ヨハネが、ヘロディアの唆しによって夫ヘロデによって自分の憎き者を殺したのと同じように、イゼベルは夫アハブに唆してナボテを中傷する者たちを雇い、王の印鑑を使って彼を死刑にするように定め、そしてアハブはナボテの畑を奪い取りました。また、エリヤ自身も殺そうとしました。そしてその首のない遺体を、ヨハネの弟子たちが引き取り、葬った後に、イエス様のところに行って報告したのです。

2A 五千人への給食 13-21

この知らせを受けたイエス様は、どれだけ辛かったことでしょうか。イエス様にとって、ヨハネはルカによる福音書によると、イエス様の親戚になります。訳によれば従兄弟とも言われます。そして、イエス様は、はっきりと「ヨハネがそうなるのだったら、わたしも必ずそうなる。」ということが分かりました。後で弟子たちに、「ところが人々はエリヤを認めず、彼に対して好き勝手なことをしました。同じように人の子も、人々から苦しみを受けることになります。(17:12)」と言われます。このエリヤはヨハネのことです。人の罪の深みに、命をも冒すほどの中に入って来て、イエス様はご自分の命をお捨てになる時が近づいたことを、確実に意識されたに違いありません。今、ご自分が置かれている全体像というか、父なる神が抱いておられる計画を考えようとされたに違いありません。

1B 群衆への憐れみ 13-14

13 それを聞くと、イエスは舟でそこを去り、自分だけで寂しいところに行かれた。群衆はそれを聞き、町々から歩いてイエスの後を追った。14 イエスは舟から上がり、大勢の群衆をご覧になった。そして彼らを深くあわれんで、彼らの中の病人たちを癒やされた。

イエス様が、ヨハネの無残な死、ヘロデの深い邪悪さの中で殺されたのを聞いて、「自分だけで寂しいところに行かれた」とあります。ガリラヤ湖畔は、今でも人気のないところは沢山あります。そうしたところに行こうとされました。また、舟に乗れば、独りになることができます。ここで、ヨハネの死を悼み、またご自身のこれからの運命を思い、そして父なる神の御心を求めておられたことでしょう。ところが、群衆が岸边から歩いて行って、イエス様の行かれる舟を見ながらついて行ったのです。これはガリラヤ湖に行けば分かりますが、舟を出しても、岸边から眺めることができるし、急いで歩けば確かに追いつくかもしれません。

しかし、イエス様はご自分の悲しみを、群衆に転嫁させたかのように「深くあわれんで」おられます。イエス様の憐れみの働きは、最後の最後まで続きます。ルカ伝によれば、イエス様が捕えら

れる時に、捕えに来た大祭司の息子の右の耳を、ペテロが剣で切り落としたものを、イエス様が、「やめなさい。そこまでにしなさい。」と言われた。そして、耳にさわって彼を癒された。」(ルカ 22:51)」とあります。そして、これら群衆は必ずしも、霊的に理解があつてイエス様のところに来ているわけではありません。もしかしたら、ただ癒されたいと思っているだけで、イエス様ご自身に興味がないのかもしれませんが、けれども、イエス様はそれでも深い憐れみを示しておられました。

2B 弟子たちへの教育 15-21

そこで次に、イエス様は驚くべき奇跡を行なわれます。彼らが、食べ物がなくてひもじくなった時に、彼らに食べさせる、給食を与えられます。先ほど、ヨハネはエリヤのようであり、そしてイエス様はエリシャのような方であることを話しましたが、エリシャはかつて、わずかなパンで百人の人に食べさせた奇跡を行いました。「2列 4:42-44 ある人がバアル・シャリシャから、初穂のパンである大麦のパン二十個と、新穀一袋を、神の人のところに持って来た。神の人は「この人たちに与えて食べさせなさい」と命じた。彼の召使いは、「これだけで、どうして百人もの人に分けられるでしょうか」と言った。しかし、エリシャは言った。「この人たちに与えて食べさせなさい。【主】はこう言われる。『彼らは食べて残すだろう。』」そこで、召使いが彼らに配ると、彼らは食べて残した。【主】のことばのとおりであった。」イエス様は、これよりもさらに大きな奇跡を行われます。

15 夕方になったので、弟子たちはイエスのところに来て言った。「ここは人里離れたところですし、時刻ももう遅くなっています。村に行って自分たちで食べ物を買うことができるように、群衆を解散させてください。」16 しかし、イエスは言われた。「彼らが行く必要はありません。あなたがたがある人たちに食べる物をあげなさい。」

ここで言っている「夕方」は、午後 3 時頃でしょう。もうそろそろ食べる場所を探させないと、食べ物にありつくことができません。けれども、イエス様は「あなたがたが」ということを強調されています。イエス様は、弟子たちにご自分のなされる奇跡に関わらせることを強く願われています。

17 弟子たちは言った。「ここには五つのパンと二匹の魚しかありません。」18 するとイエスは「それを、ここに持って来なさい」と言われた。19 そして、群衆に草の上に座るように命じられた。それからイエスは、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて神をほめたたえ、パンを裂いて弟子たちにお与えになったので、弟子たちは群衆に配った。20 人々はみな、食べて満腹した。そして余ったパン切れを集めると、十二のかごがいっぱいになった。21 食べた者は、女と子どもを除いて男五千人ほどであった。

弟子たちが差し出したのが、たった五つのパンと二匹の魚です。この魚はいわゆる干し魚で、栄養補給のバーのようにして彼らは食べていました。これしかありませんでした。けれども、男だけで五千人ですから、一万人はゆうに超えていた人数だったのだと思います。それだけ食べられて、し

かも満腹していて、かつ余ったのが十二のかごいっぱいです。

ここでは、いろいろな意味をもってイエス様はこの奇跡を行なわれたような気がします。一つは、弟子たち自身がこれから、イエス様のわざを行なっていくのだということです。もちろん、すべての奇跡をそのまま行っていくことではないです。使徒の働きの中に、弟子たちがこの奇跡を行なったことは記録されていません。けれども、ここで象徴的な数字が「十二」があります。そして彼らも、十人の弟子です。イスラエルは十二部族ですが、十二には統治を意味する数字になっています。神がイスラエルを治めておられるように、今度は十二使徒によって治めるようにされます。教会を十二使徒が土台となって建て上げられ、さらに、イスラエルも十二使徒の統治によって回復します。「ルカ 22:30 そうしてあなたがたは、わたしの国でわたしの食卓に着いて食べたり飲んだりし、王座に着いて、イスラエルの十二の部族を治めるのです。」

そしてもう一つは、「主は、私たちの捧げ物を通して、ご自分の働きを行なわれる」ということです。ここで大事なのは、私たちがどれだけのものを捧げたのか？ということではないです。たった五つのパンで五千人、いや一万人以上いた人々にパンを与えたのですから、量が問題ではありません。けれども、心から、精一杯、自分のあるものを捧げているでしょうか？教会に必要なから、捧げているのでもなく、必要がなければ捧げないのでは決してありません。そうではなく、主はいつも、私たちの捧げ物を通してご自分の働きをされるということなのです。そして、私たちの奉仕を通して、私たちをはるかに超えた、とてつもない大きな働きをされるのです。

私たちが捧げるのは、五つのパンと二匹の魚かもしれません。それが精一杯、自分たちの手に持っているものです。しかし、大事なのはそれを捧げること自体です。覚えていますか、エリヤがシドンに行った時に、やもめが自分の息子と最後のパンを作ろうとしていました。けれども、エリヤはそのパンを私に渡しなさい、といったのです。常識的には、とんでもない話です。けれども、その捧げる行為によって、かめにはパンのための粉が尽きない、油のための壺にも油が尽きないようにすると神が言われたから、エリヤはそう言ったのです。

3A 嵐の中の水上歩行 22-33

1B 無理やりの解散 22-23

22 それからすぐに、イエスは弟子たちを舟に乗り込ませて、自分より先に向こう岸に向かわせ、その間に群衆を解散させられた。23 群衆を解散させてから、イエスは祈るために一人で山に登られた。夕方になっても一人でそこにおられた。

イエス様がここで、なぜ群衆を無理やりに解散させたのでしょうか？先に弟子たちには、解散させるのではないことを教えられたのに、そうさせたのか？ヨハネの福音書を見ると分かりますが、これをもって、イエス様を自分たちの王として祭り上げようとしていたのです。その動機はきわめて

不純です。イエス様は後で、彼らに対して「あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからでなく、パンを食べて満腹したからです。(ヨハネ 6:26)」とされています。イエス様は、憐れみを示される方ですが、イエスご自身を求めるのではなく、自分の欲求を満たそうとする人にはご自分の働きはされません。

そして、ここでついにイエス様は、ご自分に強いるようにして、「祈るために一人で山に登られた」とあります。イエス様はここで、ようやく一人で祈られました。群衆がご自分を不純な動機で王としたのを見た時は、さすがに疲れたことでしょう。今、何をご自分がすべきか、御父から聞くために祈られました。この祈りは夕方になっても続きました。疲れるのは肉体だけではありません。霊も疲れます。そしてある時は夜通し、祈ることもあるでしょう。イエス様はおそらく、そのことを行なわれました。私たちは時に、祈りのために人々から離れる時必要でしょう。知り合いの牧師さんや教会の人々で、祈禱院にいて一週間を過ごすという方々がおられます。

2B ペテロの訓練 24-33

24 舟はすでに陸から何スタディオンも離れていて、向かい風だったので波に悩まされていた。25 夜明けが近づいたころ、イエスは湖の上を歩いて弟子たちのところに来られた。26 イエスが湖の上を歩いておられるのを見た弟子たちは「あれは幽霊だ」と言っておびえ、恐ろしさのあまり叫んだ。27 イエスはすぐに彼らに話しかけ、「しっかりしなさい。わたした。恐れることはない」と言われた。

夕方になると、ガリラヤ湖は西からの風が強くなります。アルベル山のところにある谷が、地中海からガリラヤ地方を通して、風を湖に吹かせてきます。それで舟がどんなに前進しようにも前に進まない状態でした。それに加えてかなり沖合に出ているので、波も荒かったのです。ところが、夜明けが近いころになりました。午前三時以降のことでしょう。そこで、イエス様が水の上を歩かれたのです。弟子たちは、まだ暗い所におられるイエス様がイエス様だと分からずに怯えています。主が、「しっかりしなさい。わたした。恐れることはない」と言われています。この「わたした」は、英語ですと“I AM”です。神の名前として、モーセに示された名前です。「わたしは、ある」とも訳せるものです。イエス様は人間でありましたが、この方がなされていることは、完全に人間の範疇を越えています。そう、イエスは神がかった方でもなく、神ご自身、神の御子ご自身なのです。

この奇跡においても、イエス様は、一つの意味を持たせておられると思います。それは、世の国々における騒ぎであり、荒れている姿です。ダニエル書 7 章に、荒れている海から四頭の猛獣が出てくる幻を見せていますが、それが世界帝国の興亡の幻でした。そして黙示録 17 章には、海が世界の諸国であり、その中に大淫婦がいて、世界の王たちと不品行を行なっている姿があります。そのように、世において嵐のような状態を指しています。しかし、夜明けが来ます。ペテロ第二 1 章には、イエス様は明けの明星であるとされています。夜明け前の灯のように、預言のことばを

大事にすることを、ペテロは教えました。イエス様が来られようとする時に、それは向かい風が吹いていて疲れてしまっている弟子たちと似ているかもしれません。そこに、イエス様は全くそうした騒ぎに影響されずに、私たちのところに近づいてくることができになります。

28 するとペテロが答えて、「主よ。あなたでしたら、私に命じて、水の上を歩いてあなたのところに行かせてください」と言った。29 イエスは「来なさい」と言われた。そこでペテロは舟から出て、水の上を歩いてイエスの方に行った。30 ところが強風を見て怖くなり、沈みかけたので、「主よ、助けてください」と叫んだ。31 イエスはすぐに手を伸ばし、彼をつかんで言われた。「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか。」

ここでイエス様が行なわれていることに、ペテロが関わろうとしています。ペテロの関心事は三つありました。一つは、イエス様に近づきたいということです。彼が、復活したイエス様が朝ごはんを用意して岸辺におられた時に、「主だ」と叫んで、そのまま舟から飛び込んで岸辺に泳いで行きましたが、それだけペテロはイエス様の所にいたいと願ったのです。そしてもう一つは、ペテロはだんだん学習していったのです。イエス様が命じられたことには、力があるということです。今ここで、イエス様が命じられたら、必ずや自分はその通りになることができると信じました。そして三つ目が、彼は薄々、「自分たちがイエス様の業を行なっていくのだ」ということです。使徒の働きを見れば、イエス様が使徒たちと共に働かれる姿を見ることができますが、その多くが既にイエス様が彼らに手本を見せられたものであります。

けれども、これは訓練でした。信仰の訓練です。午前礼拝で話しましたように、彼は強風に目が留まってしまいました。それで疑いが生じ、恐れがでてきました。その時に沈みました。けれども、すぐにイエス様が救いの手を伸ばしてくださいました。「信仰が薄い」と言われましたが、おそらく微笑んでおられたことでしょう。少しずつ信仰は成長していきます。

32 そして二人が舟に乗り込むと、風はやんだ。33 舟の中にいた弟子たちは「まことに、あなたは神の子です」と言って、イエスを礼拝した。

給食の奇跡では、なぜか弟子たちはイエス様の正体について、まだ心が鈍くされていましたが、ここでようやく、イエス様がどんな方なのか気づいたようです。水の上を歩かれただけでなく、風をやませることもできる方です。神の御子ご本人であると気づき、礼拝しています。この神の子という意味合いですが、箴言にこう書いてあります。「30:4 だれが天に上り、また降りて来たのか。だれが風を両手のひらに集めたのか。だれが水を衣のうちに包んだのか。だれが地のすべての限界を堅く定めたのか。その名は何か、その子の名は何か。あなたは確かに知っている。」天と地を造られた方ご本人であります。神が天地を造られ、そして神に子があり、この子も創造主であるということです。イエス様は、ご自分が死者の中から甦ることによって、はっきりとこのことを示されます。

「ローマ 1:3-4 御子に関するものです。御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです。」

そして、このような出来事が、ピリポ・カイサリアにおいて弟子たちに、イエス様が確かに、生ける神の御子キリストであるという悟りをもたらすことになります。イエス様は無理やり、自分がキリストであって神の御子であるから信じなさいと、強制されませんでした。むしろ、人々が自分たちで、確かにそういう方であるという確信に至らせるためにみわざを行われました。私たちも、行いで信仰を示す必要があります。

4A イエスの奉仕 34-36

34 それから彼らは湖を渡り、ゲネサレの地に着いた。35 その地の人々はイエスだと気がついて、周辺の地域にくまなく知らせた。そこで人々は病人をみなイエスのもとに連れて来て、36 せめて、衣の房にでもさわらせてやってください、とイエスに懇願した。そして、さわった人たちはみな癒やされた。

ゲネサレの地は、ガリラヤ湖の北西に広がっている平野のことです。そこには、今もキブツによる農地が広がっており、そこに一世紀に発掘された舟が展示されている建物があります。ギノサレと言いますが、私たちの聖地旅行でも、そこから舟に乗って湖上遊覧をしました。

そこに、先ほどと同じように大勢の人がイエス様のところに来て、癒しを受けています。さらに、イエス様の衣の房ですが、長血を患った女も同じところに目を付けて、これに触れたら癒されると思っていました。あまりにもたくさんいるので、きちんと手を置いてもらわなくても、それでも房にだけにでも触らせてくださいということです。このことを、弟子たちが後に実行していきます。「使徒 5:15-16 そしてついには、病人を大通りへ運び出し、寝台や寝床の上に寝かせて、ペテロが通りかかるときには、せめてその影だけでも、病人のだれかにかかるようにするほどになった。また、エルサレム付近の町々から大勢の人が、病人や、汚れた霊に苦しめられている人々を連れて集まって来た。その人々はみな癒やされた。」

どうか私たちが、イエス様を見つめて、その一つでもその通りにやってみようという思いを起こしてくださいますように。そしてそれを、聖霊の力によって行うことができますように。